
零崎奇識の恋姫無双

絶対など在りはしない

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

零崎奇識の恋姫無双

【Nコード】

N6297Q

【作者名】

絶対など有りはしない

【あらすじ】

橙なる種よって殺された零崎奇識。次に気がつくとき荒野の真ん中。

殺人衝動がなくなった零崎はなにを思い生きるのか。

一話　～開幕～

「おかしいですねえ、私死んだと思ったのですけどねえ」

しかし、見えるのは見渡す限りの荒野。

そして、持っている物は死ぬ直前と同じ。

確かに私は家族の敵討ちに行き、返り討ちに遭い、『橙なる種』に殺された。なのに何故か起きたら荒野に倒れていた。それに、零崎特有の殺人衝動が消えている。

これはいわゆる、転生というやつでしょうか？

ま、とりあえず第二の人生だと思って、楽しんでみましょう。
では、とりあえず南に向かって行きましょ「おい、兄ちゃん、珍しいもん持ってんじゃねえか」

「？」

歩き出そうとした瞬間に声を掛けられ振り向く。

そこには、頭に黄色い布を巻いた三人組の男がいた。

「何でしょうか？」

「だから、その手前が持つてるそれを渡せって言ってるんだよ」

「それ？・・・ああ、《宵闇》のことか」

「そうだよ、それを「嫌です」は？」

「と言ったらどうしますか？」

「んなもん、力づくで奪うに決まってるんだろ！」

そう言つて三人共腰に着けていた剣を抜く。
はあ、面倒な世に来てしまいましたねえ。

「ま、いいでしょう。零ざ「待てい」ん？」

私の言葉に被せて聞こえる女性の声

「だ、誰だっ！」

「たった一人の庶人相手に、三人掛かりで襲いかかるなどと・・・
その所行、言語道断！」

「そんな外道の貴様らに名乗る名前など、ない！」

声が響いた瞬間。

三人組の内の一人が膝を折り崩れ落ちる。

「な・・・っ！何だコイツ！ぐはあっ！」

潰れたような無様な叫びを上げて、小柄な男が吹っ飛んだ。
ふむ、強いですね。あの槍さばきそうそう、出来るものじゃありませんからねえ。

しかし、女性があゝの槍さばきが出来るとはどんな修行をしたんでしようねえ。・・・一度でいいから戦ってみたいですねえ。

「なんだなんだ、所詮は弱者しかいたぶることしか出来ん三下か？」

おお、言いますねえ。

「くっ！・・・おい、お前ら！逃げるぞっ！」

「へ、へえ・・・」

「だ、だな・・・」

「逃がすものか！」

そう言つて、逃げる三人組を追いかけて行く。

行っちゃいました。戦ってみたかったんですけどねえ。

「大丈夫ですかー？」

「ん？」

次に掛けられたのは、間延びした声だった。

振り向くとフリフリの服を着た女性と髪をまとめてお団子にして、眼鏡をかけた女性がいた。

「大丈夫かと聞いているのだが？」

次は眼鏡の女性が聞いてくる。

「ええ、大丈夫ですよ」

「そうか、それは良かった」

「やれやれ。すまん、逃げられた」

そう言つて、槍を持って追いかけた女性が帰ってくる。

「お帰りなさい。・・・盗賊さんたち、馬でも使ってたんですか？」

おっとりした方の女性が聞く。

「うむ。同じ二本足なら負ける気はせんが、倍の数で挑まれてはな」

「まあ、追いついたただけ十分ですよー」

「それにしても、災難でしたね。この辺りは比較的盗賊の少ない地域なんですけど・・・」

そう、眼鏡をかけた女性が話し掛けてくる。

「あの、風」

そう、私が発言した瞬間殺気のこもった槍が飛んでくる。

キン！金属音が響く。

反射的に手が動く。

「っ！」

よっぽど槍の腕に自信があったようですね。驚いた顔をしている。

「何のつもりですか？」

「何のつもりとはこちらのことだ。初対面の人間の真名を呼ぶとはどういう見だ！」

真名？・・・おそらくこちらの風習なのでしょう。悪いことをしました。

「すみません。いきなり真名を呼んだことは謝ります。して、どのように呼べいいでしょうか？」

「はい、程立と呼んでくださいー」

おっとりしたほうの女性が名乗る。

「今は戯志才と名乗っております」

また、あからさまな偽名の名乗りかたをされたものですねえ。
しかし、今の名前からして、中国それも相当昔のようですね。確か、三國志にそんな名前があったような。

「して、そちらの女性は？」

「私は趙雲子龍。しかし、自分で言うのもなんだが槍に自信あったのだからお主は簡単に防いだ。お主何者だ？」

「フフ、そんなに私の腕前が気なるのですか？でしたら一戦交えませんか？」

「フム、それもまた一興」

「星殿それは止めといたいいでしょう。陳留の刺史が来てしまいます」

そう言つて、指差す戯志才殿。

指差す方向を見てみるとそこには舞い上がる土煙とはためく旗。旗の文字は『曹』

「そうだな。行こうか」

「む、行ってしまうのですか？」

「ああ、お主はどうする？」

「私は・・・そうですね残ります」

「?・・・まあいいでしょう。最後にお主の名前を聞こう」

「私は姓を零崎、名を奇識字も真名もありません。では子龍殿、《縁》があればまた会いましょう。あなたに御武運があらんことを」

一話〱開幕〱（後書き）

俺、復活！

どうも旧矢本右斗左

現零崎織識です。

さて今回の話を見てわかるように零崎奇識君には魏✓にいつてもらおうと思います。今話と次の話は原作どつりにいきたいと思います。

今の執筆状況

二話↓○

三話以降↓×

第二話、邂逅、（前書き）

急・展・開

第二話　邂逅

子龍殿と別れた後来たのは、大量の騎馬の群れ。

「華琳さま！こやつは・・・」

黒髪をオールバックにした女性が口を開く。

「・・・どうやら違うようね。連中はもっと年かさの、中年男だと聞いたわ」

華琳と呼ばれた女性が答える。

しかし、中年男？・・・もしかしてさっきの賊の事でしょうか？

「どうしましょう。連中の一味の可能性もありますし、引っ立てましょうか？」

水色の髪を左目を隠すようにオールバックにした女性が聞く。

一連の会話を聞く限りでは華琳と呼ばれた女性が彼女らの上司のようです。

しかし、引っ立てるとは物騒ですね。一応、逃げる準備はしときましょう。

「そうね・・・。けれど、逃げる様子もないということは・・・連中とは関係ないのかしら？」

「我々に怯えているいるのでしょうか。そうに決まっています！」

「怯えているというよりは、観察しているように見えるのだけれど・・・」

やはり、さっきの賊の事でしょうか？

「あの・・・」

「・・・何？」

「あなた方は誰なんでしょうか？」

「それはこちらの台詞よ。あなたこそ何者？名を尋ねる前に、自分の名を名乗りなさい」

「そうですね。そちら風に言えば、姓を零崎、名を奇識、字も真名もありません。それでここはどこなんでしょうか」

「・・・はあ？字や真名がない？そんなはずあるまい字は無くても真名はあるはずだ！貴様、真面目に答えんかあっ！」

ふむ、やはり信じてもらえてないですねえ。

「姉者。そう威圧しては、答えられるものも答えられんぞ」

「ぐう・・・。し、しかし秋蘭！こ奴が、盗賊の一味という可能性もあるのだぞ！そうですね、華琳さまっ！」

「そう？一応武器は持っているけれど、殺気の一つも感じさせないほどの手練れには見えないのだけれど？」

ふふ、人を見た目で判断していけないのですがねえ。

「・・・それはまあ、確かに」

そちらの方でもすねえ。

「零崎・・・と言ったかしら？」

「ええ」

「ここは陳留・・・。そして私は、陳留で刺史をしている者」

陳留とききましたか・・・。とすると、この華琳と呼ばれた女性は曹操、そしてこの二人が夏侯惇と夏侯淵でしょう。万が一ということもあるので知らない振りをしておきましょう。

「刺史・・・。確か税金を集めたり、法律をきめたり、街の治安を維持したりする人たちでしたっけ？」

「あら、分かっているじゃない。なら、今の自分の立場も分かっているわよね？」

「街の治安を乱した覚えはないんですがねえ」

「少なくとも、十分以上には怪しいわよ。春蘭。引っ立てなさい」

「はっ！」

「まだ連中の手掛かりがあるかもしれないわ。半数は辺りを搜索。残りは一時帰還するわよ」

ふう、やっと街に行けますねえ。

陳留

「なら、もう一度聞く。名前は？」

尋問みたいですな。まあ真面目に答えておきましょう。

「零崎奇識。字も真名もありません」

「では零崎奇識。お主の生国は」

どうでしょうか。一度死んだ身ですから生国らしい生国がないですよ。

「生国はありません」

「無い？どうということ？」

「簡単にいえば私は一度死んだということです」

「は？何を言つとるのだ貴様は。現に貴様は生きとるだろう」

「まあ、その質問に答える前に私の話を聞いてもらえませんか」

「ええ、いいわよ」

「さて、まずは・・・」

そう言って切り出した私は生きていた世界の事、零崎の性質、自分の死に際、そして、気が付いたらあの場所に立っていた事などを話

した。

「・・・俄には信じられない話ね」

やはりといったところでしょうか。

「まあ、普通の反応はそうでしょうねえ」

「何か証拠は無いの？」

「無いですね。正直、気が付いた時に持っていたのがこの《宵闇》だけだったので」

「そういえば気になっていたのだ。零崎、貴様その槍を持っているという事は武人なのだろう？」

「ええ。というかあなた私の話聞いてました？零崎は理由なく殺す殺人鬼なのです。戦えて当たり前でしょう？それにしてもあなたで呼ぶのもなんなんでそろそろ名前を教えてくださいませんかねえ」

「ああ、そういえば言って無かったわね。私は曹孟徳。それから彼女達は夏侯惇と夏侯淵よ」

「ふんっ」

「……………」

おお、予想通りですね。しかし、不思議な世界にきてしまったものですねえ。あの曹操や夏侯惇が女性とは。

「では、孟徳殿。単刀直入聞きます。あなたは曹操ですね？」

「っ！？ええそうよ。どこで知ったのそれを」

「簡単に言ってしまうと未来の知識ですね」

「未来の知識？」

「ええ、私がいた世界は貴女方が男性として活躍する物語があります。これ以上話すには孟徳殿、貴女の許可いります。聞きますか」
「どういうこと？」

「わからないですか？これから話すことは貴女方にどのようなことが起こるかを話すのですよ」

「！……そう、ならば話さなくていいわ」

「一応聞きます。何故？」

「今から起こることを聞いて何になるの。それは呪いと同じよ。次はこうなると知ってしまうとそればかりに気をとられ周りの事がわからなくなるわ。それに私が歩む私の霸道だわ。そんな事を聞いても意味はないわ」

ククッ。ここまで言うとは。予想通りと言えば予想通りですけど、ここまで胸を打たれたのは久しぶりですね。純粹に思ってしまったますね。この霸道の結末をいっしょに見てみたいと。

「曹孟徳殿」

「何かしら？」

「貴女の霸道をお手伝いしましょう。いや、させてください」

少しばかり驚いた顔をする。

「何故かしら？」

「貴女の覚悟を見て、純粹に見てみたいと思ったのですよ。その霸道の結末を見てみたいと」

「そう、覚悟はあるかしら？」

「ええ、例え貴女に拒絶されようとお手伝いしましょう」

「ならば、その名を捨てる覚悟はあるかしら？」

「当たり前でしょう。その程度のが無くて覚悟とは言えないでしょう」

「そう、なら今からあなたは姓を曹、名を零、字を奇識、真名を刀士よ」

「ハッ、拝名します」

「それではもう一度自己紹介するわ。姓を曹、名を操、字を孟徳、真名は華琳よ」

「華琳さま?!」

「いいからあなた達も言いなさい」

「私は夏侯淵。真名は秋蘭だ。よろしく頼む」

「秋蘭?!」

「姉者、華琳さまの命令だ言っしかあるまい」

「うっ。夏侯惇だ。真名は春蘭だ。まだ認めたわけじゃないからな」

「わかってますよ。では私も。曹零です。字は奇識、真名は刀土です」

こうして私は魏の一員となった。

三話〱勝負〱（前書き）

短いなあ。初の戦闘描写です。

誰か文才を分けてくれ。

三話　勝負

薙ぎ、払い、突き、受け、さらにそれに対する返し、一挙一動が相手のそして自分の命を、体力を、誇りを削っていく。

だがそれでも私は止まらない。止められない。何故なら、それが零崎の生き方だから。

さて、何故私がこんな戯言を言っているかというと、死合いをやっているからである。え、字が違うつて？いえいえ、合ってますよ。だって、相手が……春蘭ですから。

「おい！考え事をしている暇があるのか！？」

そう聞こえた瞬間、私の突きの合間を縫って大剣の斬撃が飛んでくる。

「むっ！」

私もそれにあわせて、薙ぎを放つ。

ギーン！

金属音が迸る。

「まだまだ！」

ギーン！ギーン！ギーン！

連続して、斬撃が走る。しかし、私もそれにあわせて、槍を薙ぐ。瞬間、春蘭が体勢を整えるために体を引く。しかし、それを見逃す

程私も落ちていない。

「次は私の番です」

その瞬間、突く、突く、突く、突く、突く。怒涛の突きの嵐である。

「くっ」

一瞬、春蘭の体が傾く。瞬間、私は槍を反転、そのままの勢いで大剣の刃の部分を柄頭で叩く。そうすると、突きに対するように向いていた力が予想外の方向にねじ曲げられ、決定的に体が傾く。そして、その瞬間に首に槍の刃先を突きつける。

「そこまでっ！」

秋蘭の声が響く。

「ふう」

「くそっ！もう一度勝負しろ。刀士。今度は負けん」

「ふう。戦場では、一度負けたら終わりなんですよ」

「しかし——」

「刀士の言う通りよ。春蘭。戦場では、一度負けたら終わりなの。だから、今回はあなたの負けを認めなさい」

「そうだぞ。姉者。華琳様の言う通りだ」

「ううー。華琳様や秋蘭まで……。・・・刀士！」

「ん？」

「今回は負けてやるが次は負けんぞ」

「ええ、いつでもかかって来てください。負けませんから」

「しかし、刀士。あなた、ここまで戦えたのね。まさか、春蘭に勝つとは思わなかったわ」

「ああ、私もまさか、姉者には勝てるとは思わなかった」

「ありがとうございます。正直、びっくりしましたね。春蘭が勝てるか分からなかったですね」

「確率はどのくらいだったの？」

「五分五分ですね。今日は疲れました」

「今日のあなたの政務は明日に回していいわ。今日はゆっくりと休んでちょうだい」

「ええ、そうさせていただきます」

「ああ、疲れました。」

三話〱勝負〱（後書き）

はい、短かったですね。
すみません。

ちなみにオリ主の武器は槍です。

さて、ここでアンケートをとりたいと思います。
題して《オリ主を誰と絡ませるか》です。

✓は魏のキャラ+オリキャラまたはハーレムです。
アンケートの締め切りは10話が投稿されるまでです。
感想お待ちしております。ではノシ

四話〱王佐〱（前書き）

遅くなりました。

作者は受験に落ちてしまったんです。

まあ、その他もろもろ事情により更新が遅くなりました。

まあ、これからは多分、さして遅くならないのでよろしく願います。

四話　王佐

「ふむ、何度見ても、壮観ですねえ」

城壁の下を走り回るのは、完全武装の兵士達。

束ねられた槍は薪のように積み上げられ、その隣には槍束をふたまり小さくした束がさらに大きな山を築いている。

弓兵隊の使う、矢。

武器に糧食、補充の矢玉。また、薬に防具、調理の鍋など、戦に使う備品はその幅広さに事欠かない。

自分の名前上様々な武器を見たことはあるが、ここまで揃ったのは、見たことが無い。

「どうした、そんな所に立って」

「む、春蘭ですか。いえ、こんなにたくさんの兵士を見るのはさすがになかったものですから」

裏の世界の人間というのは、個々の能力が高いため、下手に共闘などすれば逆に足を引っ張り合ってしまう。

・・・勾宮のような例外もいるが。

「この程度でか？」

「ええ、春蘭は見慣れているようですが。私がいた世界はあまり軍隊はおろか共闘すらしませんでしたので」

「ふむ、しかし、囲まれたらどうするのだ？」

「春蘭、逆に質問しましょう。貴女が囲まれたとしましょう」

「うむ」

「全員が私並みの実力とします。しかし、連携が全く出来ていません。貴女ならどうしますか？」

「私なら隙について、全員倒す！」

「まあ、簡単に言えばそんな状態なのですよ私のいた世界は・・・」

「・・・何を無駄話をしているの、二人とも」

「か・・・っ、華琳さま・・・！これは刀士が！」

「む、先に話し掛けたのは、貴女でしょう。春蘭」

「はあ・・・春蘭。装備品と兵の確認の最終報告、受けていないわよ。数はちゃんと揃っているの？」

「は・・・はいっ。全て滞りなく済んでおります！刀士に声をかけられたため、報告が遅れました！」

「・・・その刀士には、糧食の最終点検の帳簿を受け取ってくるよっ、言っておいたはずよね？」

「ふむ・・・。まあ、あるにはあるのですが、渡して良いのか悩ん

でおりまして・・・」

「それを判断するのは、私よ。早く渡してちょうだい」

「はあ、分かりました」

そう言つて渡すと、華琳はすぐにそれを確認し始める。

「・・・・・・・・」

ペラ

紙をめくる音だけがする。

「・・・・・・・・」

「・・・秋蘭」

「はっ」

「この監督官というのは、一体何者なのかしら？」

「はい。先日、志願してきた新人です。仕事の手際が良かったので、今回の食料調達を任せてみたのですが・・・何か問題でも？」

「ここに呼びなさい。大至急よ」

「はっ！」

そう言つて走り去つてゆく秋蘭。

「・・・こういう事だったのね、刀士」

「ええ、こういう事ですよ、華琳」

「???…どういう事だ、刀士？」

「もう少ししたら分かりますから待ってください、春蘭」

「う、うむ」

「しかし……遅いわね」

「ええ、遅いですねえ……」

「遅いですなあ……」

はあ、空気が痛いですねえ。

「華琳さま、連れて参りました」

戻ってきた秋蘭に連れられてきたのは、ブロンドの髪の小柄な女性でした。

「おまえが食料の調達を？」

「はい。必要十分な量は、用意したつもりですが……何か問題でもありましたでしょうか？」

「必要十分って……どういっつもりかしら？指定した量の半分しか準備できていないじゃない！」

そう、半分しかなかったのだ。最初見たとき驚きました。

「このまま出撃したら、糧食不足で行き倒れになる所だったわ。そうになったら、あなたはどう責任をとるつもりかしら？」

「いえ。そうはならないはずです」

「？・・・どういう事でしょうか？」

「何？・・・どういう事？」

「理由は三つあります。お聞きいただけますか？」

「・・・説明なさい。納得いく理由なら、許してあげてもいいですよ」

「・・・ご納得いただければ、それは私の不能がいたす所。この場で我が首、はねていただいて結構にございます」

ほう・・・。なかなか肝が据わってますね。

「・・・二言はないぞ？」

「はっ。では、説明させていただきますが・・・」

「・・・まず一つ目。曹操さまは慎重なお方ゆえ、必ずご自分の目で糧食の最終確認をなさいます。そこで問題があれば、こうして責任者を呼ぶはず。行き倒れにはなりません」

「ば・・・っ！馬鹿にしているの！？春蘭！」

「はっ！」

本当にはねる気でしょうか？

・・・まあ、華琳の性格でしたらはねるでしょう。

でも、ここまで頭の回る人間も少ないでしょうから一応、止めておきましょうかねえ。

「まあまあ、華琳、首をはねるのは、もう二つの理由を聞いてから判断してでも遅くないでしょう？」

「刀士の言う通りかと。それに華琳さま、先ほどのお約束は・・・」

「・・・そうだったわね。で、次は何？」

「次に二つ目。糧食が少なければ身軽になり、輸送部隊の行軍速度も上がります。よって、討伐全体にかかる時間は、大幅に短縮できるでしょう」

まあ、確かに食料は荷車に積みますから、その数が減れば、軽くなり、移動速度は上がるでしょう。

しかし・・・

「ん・・・？なあ、秋蘭」

「どうした姉者。そんな難しい顔をして」

「行軍速度が早くなっても、移動する時間が短くなるだけではないのか？討伐にかかる時間までは半分にはならない・・・よな？」

「ならないぞ」

「良かった。私の頭が悪くなったのかと思ったぞ」

「そうか。良かったな、姉者」

「うむ」

そう。春蘭の言う通り、当たり前だが、討伐というからには、戦闘や休憩の時間も必要なのだ。

そもそも、食料が少しばかり軽くなった程度じゃあ、移動速度が倍になるわけではないのである。

「まあ、いいわ。最後の理由、言ってみなさい」

「はっ。三つ目ですが・・・私の提案する作戦を採れば、戦闘時間はさらに短くなるでしょう。よって、この糧食の量で十分だと判断いたしました」

さすがに驚きですね。

「曹操さま！どうかこの荀イクめを、曹操さまを勝利に導く軍師として、麾下にお加え下さいませ！」

「ふむ・・・」

まあ、予想の範囲内でしたがまさか、あの荀イクでしたか。

「な・・・っ!？」

「何と・・・」

「・・・・・・・・」

「どうか！どうか！曹操さま！」

「・・・荀イク。あなたの真名は」

「桂花にございます」

「桂花。あなた・・・この曹操を試したわね？」

「はい」

「な・・・っ！貴様、何をいけしゃあしゃあと・・・。華琳さま！
このような無礼な輩、即刻首をはねてしましましょう！」

「あなたは黙っていないさい！私の運命を決めていいのは、曹操さま
だけよ！」

「ぐ・・・っ！貴様あ・・・！」

「まあ、待ちなさい！貴女は落ち着いた方が良いでしょうよ、春蘭」

「ぐうう・・・」

「桂花。軍師としての経験は？」

「はっ。ここに来るまでは、南皮で軍師をしておりました」

「・・・そう」

南皮は確か、、袁紹が治めている土地だったような・・・

「春ら・・・いや、秋蘭。華琳は何か知ってるようですが・・・？」

「待て！刀士。何故言い直した！？」

春蘭が何か言ってますが、まあ、無視しときましょう。

「南皮は袁紹の本拠地だ。袁紹というのは、華琳さまとは昔からの腐れ縁でな・・・」

「ああ、なるほど」

「どうせあれのことだから、軍師の言葉など聞きはしなかったでしょう」

「それに嫌気が差して、この辺りまで流れてきたのかしら？」

「・・・まさか。聞かぬ相手に説くことは、軍師の腕の見せ所。まして仕える主が天を取る器であるならば、その為に己が力を振るうこと、何を惜しみ、ためらいましようや」

「・・・ならばその力、私のために振るうことは惜しまない？」

「ひと目見た瞬間、私の全てを捧げるお方と確信いたしました。もしご不要とあらば、この荀イク、生きてこの場を去る気はありません。遠慮なく、この場でお斬り捨ててくださいませ！」

「ふむ、華琳」

「・・・」

「華琳さま・・・」

「春蘭」

「はっ」

斬り捨てる気でしょうか？まあ、ここは黙って見ておきましょう。

「華琳さま・・・っ！」

秋蘭の言葉を聞く様子はなく、華琳は春蘭から受け取った大鎌をゆつくりと荀イクに突き付けた。

「桂花。私がこの世で尤も腹立たしく思うこと。それは他人に試されるということ。・・・分かってるかしら？」

「・・・華琳何を？」

「・・・なるほど。そういうことでしたか。ならば、止める必要は要りませんね。」

「はっ。そこをあえて試させていただきました」

「そう・・・。ならば、こうする事もあなたの手のひらの上という事よね・・・」

そう言い、華琳は振り上げた刃を振り下ろし・・・！

「・・・」

「・・・」

「・・・」

荀イク、春蘭、秋蘭が息を呑む。

.....

.....

...

が……荀イクはその場に立ったまま。

そして、血は、一滴たりとも飛び散りはしなかった。

「やはり、寸止めですか……」

おそらく、刃に絡み付いた髪の毛は、荀イクのでしょう。

ほんの少しでも荀イクが動いていれば、そのまま真つ二つになっていたでしょうね。

「当然でしょう。……けれど桂花。もし私が本当に振り下ろしていたら、どうするつもりだった？」

「それが天命と、受け入れておりました。天を取る器に看取られるなら、それを誇りこそすれ、恨むことなどございませぬ」

「……嘘は嫌いよ。本当の事を言いなさい」

「曹操さまのご気性からして、試させれたなら、必ず試し返すに違いないと思いましたので。避ける気など毛頭ありませんでした」

「……それに私は軍師であって武官ではありませんぬ。あの状態から曹操さまの一撃を防ぐ術は、そもそもありませんでした」

「そう……」

そう小さく呟いた華琳が、荀イクに突き付けていた大鎌をゆっくり下ろす。

「……ふふっ」

？

「あははははははっ！」

「か、華琳さま……！？」

「最高よ、桂花。私を二度も試す度胸とその知謀、気に入ったわ」

「あなたの才、私が天下を取るために存分に使わせてもらう事にする。いいわね？」

「はっ！」

「ならまずは、この討伐行を成功させてみなさい。糧食は半分で良いと言ったのだから……。もし不足したならその失態、身をもって償ってもらわよ」

「御意！」

こうして、華琳は軍師を手に入れました。

四話、王佐、（後書き）

すいません。

今回は原作と変わりませんね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6297q/>

零崎奇識の恋姫無双

2011年4月3日23時03分発行